針葉樹會報

通卷 第五十五號

僕達の造りたい山小舍について

山小舍狂

その一、 かきはじめ

一昨年の春の事だつたか、一年一年と春を迎へる度に、部員の數は減り、殘る人々にも先に立つて山へ入いる者は少く、新しい若い連中も入いつて來て吳れず、これでは部は先き先きどうなつてしまふのだらうかと、心淋しくもひとり思はずに居られなかつたけれども、その次の春から、夏秋と、一シーズン終るごとに、元氣な有望な人達が續々と僕達のグループに加はつて、去年の九月からは、毎木曜日の晝過ぎに開く定期集會には、何といふ目的のない時でも十人十五人は集り、行つた山、行く山について語り合ひ、前に時には廣すぎると思つたあの部室が、窮屈で困ることさへある樣になつた。

その頃からだ。僕達の間に、僕達の造りたい山小舍の話が、ごからさもなく現はれて、話は夢の如く、いつしか小舍の場所から、內部の設備に到るまで、僕達があの國立の松林の中の部室でおのが想ふことを、暗くなるまで語り合ふ日の續いたのは。山小舍建設委員が選出されたのもその頃だつた。——僕達の山小舍が出來たらと、未だそれを造ることの是非さへ眞自面に考へられてゐないけれども、想ひは早くも先に走つて、その時の樂しい山小舍生活の夢は、幾度となく僕達の面前に浮び上がる。

僕達の夢——今心嬉しくも抱いて居るこの山小舍の夢は、青年のよく見るといふ泡の如く果住なき夢の一つとして、まもなく消え去つてしまふものなのだらうか。それは餘りに悲しい。實際僕達のこの夢は未だ夢の外へは一歩も出て居ない。僕達の考へることは兎角理想へのみ走しる。しかし、やがてこの僕達の想ひが、夢の世界から現實へ下りて、ふと吾にかへるときには、早くも何處かの山の林の中に、僕達の小舍が造られる。賑かな、快よい響きが、鳥の啼づり木のざわめきよりも高く、さながら僕達の幸福を祝福するかの如くに、響き渡つてゐるかも知れない。

僕達の夢——それが實現する迄には、かなり多くの障害が行手に横はる。併し乍ら、僕達の燃える樣なこの熱望は、必ずや近き將來に於て、何處かの山の懷に、夢ならぬ現實の山小舍を、造り上げるだらうと信じる。それがためには、僕達にはより一層の努力が必要だ。勿論、針葉樹會員の力强き後援も待たなければならないだらうし、又僕達の次に來る若い人達の獻身も必要だ。僕達のすべての精力はあくまでこの目的に注がれなければならない。

私がこゝに、恥をも省みず、この拙き一文をば榮ある傳統に輝

くこの僕達の誌上に記すのは、これが僕達の山小舍の一釘を打つに足る力無きことは知りつゝも、僕達の夢を蔽ふて漠湖と煙る霧が思はずも襲ひ來る峰の暴風に晴れる朝が、一年でも一月でも一日でも早く來れかしと祈る僕の熱情が、おさへんとてもおさへきれずに筆を走らせたのに他ならない。若し幸ひにして、僕達の山小舍の夢が具體化して、僕達の樂しい山小舍生活のできる日が、指折り數へて待つことができる迄に進むならば、よしこの拙文の棄てられ省みられざるとも、筆者は限りなき喜びを以て、その日を待つものである。

序を終るに當り、山小舍に關しては何であらうとも、御意見並に參考資料御存知の限り、建設委員の誰のところへなりと御敎示御貸與下されたく、希望してやまない。

その二、　國立の部室

僕達の夢の山小舍。僕達の造りたい山小舍。僕達は僕達の山小舍が欲しい。何處か高い山の懷に。何處か深い針葉樹林の奥に。

僕達は今、國立の靜かな雜木林の中に、先輩達の努力の結晶ともたとへられる部室——山小舍を持つてゐる。頑丈な落着いた如何にも山男にふさはしい小舍。僕達の山の夢はこゝで培かはれ、僕達の山の思ひは此處で育て上げられる。春に香る木の綠は、高原を、夏のそよ吹く涼風は穗高の峰を、又秋になれば、四周の落葉樹は一せいに紅葉して、秩父の谷に勝る仙境となる。冬の朝夜通し降りつもつた雪は、屋根につらゝさへ下げて、あたり足跡無き雪原は、いつしか想ひを冬山の頂きへと走らせる。

四月、五月、幸ひに學部へ進級したばかりの頃は唯毎日部室で暮せるのが嬉しくて、暇さへあれば部室に行つて、何をするあてもなく、山の本を開けて見たり、ピッケルをついてあるいてみたり、長い椅子に寢てみたり、窓に腰掛けて栗の木、青空を眺めたりしてゐた。一日中駄べつてゐることもあれば、全く誰も來ないこともある。そんな時ひとりで靜かな山の氣分を味はつて、夕方になつてから富士見通りを歸ると、大町か島々でもあるいてゐる樣な氣がした。

九月の初めのことだつた。夏休み中行かなかつた部室に、登校第一番、誰か待つて居はしまいかと思ひ乍ら、行つて見て驚いた。部室が見えない。柔劍道場から國立小學校まで、あやしげな堀立小舍が立ち並んでゐる。いつもの小經さへ見當らない。

しかし部室はあることはあつた。無殘な姿で。悲慘な恰好して東側南側の林はすべて切り倒されてゐる。道からはあらはに部室の茶色い壁が見える。神河地の味もあり秩父の氣分もした部室も今や分讓地の空家みたいに、そつぽを向いて立つてゐる。

部室がこんなになつたことが僕達の山小舍建設の意識を强めたのだ。遲かれ早かれこの部室は移さる可き運命にあると言ふ黑川氏の言により、どうせ移すなら山の中へといふ氣が起る。勿論これは出來ない話だが。こゝで話は一轉して、山へ移せないのなら新しく山へ小舍を造らうぢやないかと言ふことになつた。部室の移轉は學校でやつて吳れるさうだから、床の修繕や壁の塗替への

必要はなくなつた譯だから、その費用を山小舍建設の運動に使へる。又部員も多くなつた。そして皆が乘氣だ。造りたい熱望に駈られてゐる。早く造りたい。今造らなければ永久に造れない。

僕達は國立の部室を持つてゐる。その上に山小舍を持つのは贅澤かも知れない。併し僕達は先輩の造つて呉れた部室に閉ぢこもつてゐるだけで――それを維持して行くだけで滿足することは出來ない。そんなことしてゐたのでは沈滯が來るだけだ。僕達が山小舍建設といふ理想を以て眞摯な努力をすることは、必ずや部の隆盛、部の前進をもたらすに違ひない。先輩方の跡を守り通すことは勿論非常に難かしい。しかし先輩方の努力のすべてはそれだけが部の全體として固守さる可きものでない。それらの尊い努力の上に後輩の活躍が部の發展が計られてこそ、保守に價値もあり、進歩もより一層なされ得るものと信じる。かくて僕達が部室の外に立ち出て、山小舍の建設に努力するのも亦部のための眞自面な行ひだと思ふ。僕達の部もこゝまで育つて來たのである。

僕達は國立の部室を持つてゐる。その上に又、かくの如く山小舍を計畫することは財政的に危險かも知れない。併し乍ら、一度び僕達が山小舍を建設する以上、その財政が後に來る人達を苦しめる樣な計畫はしたくない。たとへ山小舍の規模は少さくても充分な設備と堅固さを持つた山小舍を造りたい。そして行く行くは完全に獨立して維持して行ける方法は講じて置きたい。それが出來ない位なら造らない方が勿論良いに決つてゐる。

僕達はこれから、國立の部室で、山小舍建設計畫を毎日論じ合ふだらう。一つの山小舍を造ること。いや僕達自身のものである山小舍を造ることを計畫することが出來るのはどんなに嬉しいことだらう。建設の苦しみは大きいが、その苦しみより以上の喜びが建設自體の中に在る。

來給へ。集つて話さうぢやないか。僕達の山小舍のことを、僕達の造りたい山小舍のことを。（未完）

三月末の木曾御嶽

クマ

（一）

例によつてペン、コン、クマの組合せで記錄にもある通り三月下旬木曾の御嶽へ出掛けました。孫さんは自分では晴天居士の積りでゐるので一度置いてけぼりにしたら何んな工合になるかと今度の行にはわざと誘はずに行つた譯です。ペン公がハイラート勿々なので天氣の方は多少心配したのでしたが、コン、クマの神通力の方が勝つたか登頂の日は實に素晴しい快晴に惠まれました。ペン公の惡運强きにも全く驚いた次第です。

最初の日は朝から雨でした。木曾福島の驛に下りたらザー〳〵と遠慮なく降つてゐます。バスが直ぐ出るのかと思つたら案に相違パンフレットまで出して置いてあれぢや困ると思ひます。兎に角徒歩溪流會の連中が八人と他に二、三人居たのでバスを出して貰ふ事に交渉が纏まつたのですが料金がパンフレットより十錢高いのです。怪しからん。鐵道大臣に上申するからと驚かして十錢

値引をさせ廣告通りの値段で田中まで行く事になりました。

木曾川だか王瀧川だかの上を車は走りますが可なりひどい道で景色が飛んだり跳ねたりして一向落着いた氣分になれません。田中で下車、お宮で祈願をこめてからだら〳〵登りの坂を登つて行きます。雨は中々止み相にもなく谷奥には御嶽の裾山が斑に雪を被つて濃い霧の間に隱見してゐます。ヤッケを着、スキーを擔いであるくのは相當熱い仕事でした。溪流會の人達とは後になり先になり漸く橋の手前にある六合小屋の支店に辿り着きました。暫く上り込んでウドンなどたべてゐると城南山岳會で知り合ひの某士が下山して來るのに會ひました。頂上の方は相當面白いといふ話なので胸をおどらせた譯です。茲で佐々木が怪我をした事をきゝ又小谷部が風邪をひいたとか食ひ過ぎ(?)たとかで皆二日前に歸つて了つたとの事で少し許りがつかりしましたが必要なら人夫の方はどうにでもなると思つてヤホラ御み腰を上げる事にしました。

橋を渡つて平坦な道を暫く行き四合目の瀧（此處は丁度神戸の布引の瀧附近を思ひ出させる處です）を過ぎヂグザグに登ると尾根の一端に出ました。スキーは此處からつける事にしました。雨が降つてゐる位ですから勿論いゝ雪ぢやありません。でも擔いで行くより遙かに樂です。ヒラを一廻りすると俄然廣々とした草の斜面に出ました。スキー場としては可なりいゝ處だと思ひます。雪さへ良ければこんな所で遊んでゐるのも面白いでせう。正小屋といふのがその中心にある譯です。

此の原を過ぎ一段上の尾根の鼻に出ると此處が千本松の小屋となります。此の上が森林帶の下の限界點で三人は尾根から右へ捲いて森の中を通り又尾根筋へ出て一路六合中の小屋に向ひましたが相當へばつて來てゐるので中々の小屋です。此の邊に寒中登山の札がチョイ〳〵木の枝にぶらさげてあるのでスキーもなしに登山するものかなと感心した處が、實は頂上に行つた譯でなくその札のある處まで來た記しで夏來た時に講中の人達に俺は冬此處まで來たのだといふ事を示す爲めのものであるとの事でありました。

斯くして漸く中の小屋に着いたのは夕方近くの四時四十五分でありました。小屋に着いて驚きましたれ、「あなたが近藤さんであなたがペンさんで、こちらが吉澤さんで……」と云つた具合に小屋の若主人がわざ〳〵の御出迎へ、「さあどうぞこちらへ」といふので上つて見ると三人の爲め特別奇麗な部屋が用意してあり炬燵までもういゝ具合に温まつてゐた。宮樣でもないのに嫌に丁寧な御取扱ひだ、後がこはいぞなんて云つてゐる内主人が又這入つて來て「皆さんもう御歸りになりましたのによく御出になりました。明日は上天氣でせうから御悠り……」とそれから色々の話で結局私達への待遇も小谷部森脇の連中が大きなホラを吹いて置いた爲めだつた事がわかつた。案に相違、ルンペン見たいな大先輩の御入來には御主人もいさゝか驚いた事だろう。然し夜の食事なども先へ着いた連中よりもさいふより最後に御着きになつた私達に最初に持つて來、隣座敷にウヨ〳〵してゐる連中をして「めしがすいてもひもぢうない」とか「早く腹を持つて來い」なんてごならせてゐた。こうなるとこつちも大つぴらに食ふ譯に行

かず、生れてはじめてのミルク入りのライスカレーを音をさせずに食つたといふ譯、賓客又つらき哉と泌々感じた事でした。

暗くなると共に風が次第に出て來ました。早大經濟學部出の若主人は仕事が濟むとは私達の部屋に來て山の樣子を話して吳れます。「此の分ぢや明日は確實に天氣ですよ」といふ言葉にフト硝子越しに外を見ると漆黑の夜空に大きな星が幾つもキラ〳〵とまばたいて居ました。

此の小屋も實は猿倉や長ザク下の小屋と同じ程度のものかと考へてゐましたがその立派な完全さには驚きました。持つて來た防寒具があくびをする位でした。疊がひいてあるのでも想像がつく事と思ひます。然し矢張り寒さは相當なものでした。豪遊に布團をかけては居ますが室内で零下何度では肩の邊りがスイ〳〵と寒いのです。こんな時には例のウィント・ヤッケが實に役に立つ事を發見しました。私もペン公と同じ流儀でヤッケがなんだか嫌いでしたが實際使つて見るとその有難さがよくわかる事なんですから持つてない人は早く買ふ事ですれ。

× × ×

翌日は豫定通りの快晴・少し風が强いのが氣になつたが身仕度をして小屋から直ぐ森林の斜面に這入る。暫く登ると木曾駒が後方に木曾の谷を隔てゝ屏風の樣に立並んでゐました。本岳よりも三ノ澤岳が立派に大きく見えます。今から丁度一年前、そして又十何年以前の昔あの山の上をうろついて廻つた事があると思ふと一しほ懷しさを覺えます。死んだ湯淺の事、トンちやんと遊びに行つた事のあるあの山の向ふの伊那大島に住む叔父の家、皆一昔前の思ひ出となりました。

雨の爲めガリ〳〵になつた登山路、階段登りも中々辛いです。一時間して漸く飯盛の小屋に着きました。コバルト色の空、仰ぐと頂上の一角が二峰を爲してクッキリと白く青空をきつてゐました。雪煙が上つてゐます、相當强い風が吹いてゐるらしいです。

七合小屋は知らぬ内に過ぎて怎うやら森林帶の上部限界に出たやうでした。右手に乘鞍と並んで穗高が見えます。立派な眺めでした。夏の登山の物足りなさが泌々思へるのでした。

八合小屋の便所が左手高く見えて來ます。シー、デポーはあの等高線上だといはれてゐるので元氣を出して吹き晒しの大尾根をシールとスチイールを利かせて登つて行きました。

風はシー、デポーに着いた時が一番劇しく他のパーティの人は帽子を飛ばせて了ひました。寒さは寒し風はひどいし全く閉口でした。此處から九合の小屋(下)までは東向きの斜面を登ります。アイゼンはもぐりもせず丁度い〻具合に利いて吳れます。鞍部に出て一休み、パンなど嚙つてゐる内に先に登つたトホケル會の人が二人元氣に下山して來ました。此の内の一人、私に「加藤文太郎氏を知つてゐますか」と聞いたあの眞黑な猿の樣な人が一倉の岩壁で一ケ月後に死ぬ運命にあつたとは誰が氣がつきませう。解し得ぬのは人の運命です。

九合(下)の小屋の下を左に横切つて澤から上に登る事にしました。九合上の小屋からでもい〻のですが一寸急でステップを切ら

ればなりません。佐々木は此處でアイゼンを引つかけて落ちたらしいのです。下から行けば何でもなかつたのですがね。

此の澤をつめた處が廣くなつてゐてずつと御岳最高點へ續いてゐます。風もどうやら納まつて氷雪の山に登つてゐるとは思へぬ程の氣樂さです。

頂上では關西のウルサ型がウヨ〳〵してゐるので寫眞をとり食事を濟ませ匆々にして歸途につきました。繼母への山稜が素晴らしく立派に見えます。加賀の白山が繼子の先に巨鯨の如く横はつてゐました。

歸りは五六月頃の氣樂さでドン〳〵馳けるやうに下り忽ちデポーに戻りつきました。登りの時とは宛で異り、風もなく暖かな春の山の氣分と變りました。神戸スキークラブとかの人達が七、八人何だか譯のわからぬ事をガヤ〳〵さへずつてゐるので早速スキーをつけて八合小屋寄りの澤へ下りました。實にいゝ雪でシュテムクリスチヤニヤが氣樂に利いて吳れます。いゝ加減の所から森林帶に這り重い雪の中を惡戰苦鬪、七合から飯盛も忽ち過ぎて中の小屋に辿りつきました。

千本松から先はべタ〳〵な雪でしたがよく滑りました。ほつて置いても滑つて行く許りですから愉快です。私は一度岩角に尻をぶつけ、次に素晴しい顏面制動をやつて眼鏡をすつ飛ばせました が兎に角愉快なスキー行でありました。

六合支店でウドンをたべ、（近ちやんは二杯半、ペンちやんは二杯、小生は一杯半）娘さんの意向に從ひスキーは前宮の少し手前まで用ひました。之が今年の滑り收めとなるのでせう。

田中では近ちやんがウンちやんに間違へられた事件など起り、驛前では丼を食ひ過ぎ靴がはけなかつたなんて失敗を演じましたが、コン、ペン、クマの三人はどうやら五分遲れた鹽尻行きに無事乘る事が出來ました。

狸

（二）

『頃は彌生も末つかた、まかり出でたる熊、ペン、コンの三人連、木曾路の旅の物語りの一席　さあ〳〵御立會ひ聞いたり〳〵』と一席會員諸賢の前に辯じたき位種が澤山ある。

三月は二十日の晩三人は例の時勢遲れの恰好をして新宿驛に現はれる。晴天請合ひの熊さんと僕、雨天間違ひなしのペンちやん。是れは「新らしき奥樣の泣きの涙の思ひが必ず天氣を曇らして見せる」と云ふ。

若し各自同じ力であれば二對一であるから何んとか曇り位で濟まされ樣し、四年間に二日の晴天を呼ぶ僕と熊さんである、殊によつたら、あわよくば、てなわけである。

汽車に乘つた途端に僕が一圓四十錢程損をした事が分つた。木曾福島迄は往復二割引があるとは全く知らなかつた。二人から盛んにさつちめられたが片道を買つたと云ふ現實の前には何んとも言逃れのすべもない。

鹽尻で夜があけた。あゝ矢張り雨である、全くしよぼ〳〵降り忍び泣きと云ふ形である。福島驛から大型バス（是れは名前はよ

いが大した時代物なり）で黒澤口の田中で下車する。先ず御嶽神社里宮に參拜して天候運の招來を祈願する。特に僕と熊さんはあらゆる努力を拂つて雨を齊らさんとするが、二人の力は今や一人のペンちやんに及ばない情けない有樣である。到々屋敷野の浦澤方迄來た時には全く濡れ鼠である。

中の小屋に着くと早大卒業と云ふ「インテリ」の主人が迎えて「吉澤さんですか、村尾さんですか」と頗る丁寧に慇懃を極める。三人とも一寸呑まれた形なり。聞けば數日前商大山岳部員小谷部某氏外數名來り浦澤氏に「偉き人物數名登山の豫定なり」と吹聽せるものなりと云ふ。

山小屋でこんな工合に取扱はれたる事なき三人なれば誠にぎまぎして一寸醜態を演ぢたり。『學生よ!! 餘り先輩を窮地に陷らしめる可からず』

明くれば三月二十二日、誠に記念す可き日であつた。何が記念す可きだ、卽ち此處に晴天組が又もや凱歌を奏したればなり。天を摩する木曾の大密林を通してきら〳〵輝く夜明けの明星を仰いだ。何んと云ふ幸福であらう。

小屋からの四時間半は實に嬉しくも苦しかつた。「但し苦しかつたのは僕丈けなり」

登頂の喜びを滿喫して神社前で記念撮影をする。去年苦しんだ木曾駒がよく見えた。下りには遂鼻歌が出る。頂上より一寸下さた處でペンちやんと僕二人が如何にも歩いて居る樣なポーズをして熊さんに寫眞をとつてもらつた處實にうまくいつた。數分間、變な恰好をして立留つて居たのが寫眞になると實に景氣よく下つて居る姿である。

中の小屋でゆつくり休み「パラフイシ」を厚くぬつて嬉しくも滑降を樂しんだ。屋敷野で又浦澤方に上り込み腹をこしらえて日の暮れ方黒澤口の田中旅館前に着いた。

三人で一臺タクシーを雇つて木曾福島迄豪遊なる自動車旅行をせんものと休んで居ると一人の酔ぱらいが來て僕に話しかけた。其の會話を一寸書いて見る事にする。

酔ぱらい

『今晩中に木曾福島に出ないと家に歸れない。實は今其處で女の氣狂に會つたが一寸美人だつたので、からかつた處色々無理を云はれて到々二十錢とられたよ。處で自動車はどうしてくれる』

狸

『そんな事は知らないよ、旅館の主人に掛け合つたらよいぢやないか』

酔ぱらい

『旦那そんな事を云はないで乘せてくださいよ、割當ては出すからね』更に側に立つて居た熊さんに向つて

『旦那よいでせうね。此の運轉手さんに賴んで乘せてください

よ』

熊『僕はいやだ』

酔ぱらい、今度は再び僕に向つて

『れ、運轉手さん。賴むから乘せて下さいよ割當は出すから!!』

狸、すつかりむくれる

『僕は運轉手ぢやないよ』と怒鳴る

醉ばらい

『あゝそうですか、れゝいゝでせう。金は持つて居るんだから』

醉ばらい、ぼつ〳〵着く登山者に向つて又

『此の運轉手さんは乘せてくれないので弱つちやつた、一緒に乘せて貰らひ度いれ、いゝでせう』

盛んに運轉手〳〵と僕の事を云ひ振らす、到々たまり兼ねて又もや

狸『運轉手ぢやない』と重ねて大聲をあげる

醉ばらい

『あゝそうですかすみません。どうも運轉手が……』

いや全くこんなに閉口した事はない。運轉手に非らざる事を醉ばらいに證明する何物もないので全く水掛論である。醉ばらいは飽く迄僕が運轉手である事を確信して疑はないのだからやりきれない。

側でペン公熊さんは一寸とも仲間の窮地を同情もせず、くす〳〵笑ふ、そうすると外の登山者も笑ふ。

笑はれて見ると遂釣り込まれて『はてな俺は運轉手かな』なんて飛んでもない事を一寸考へる。

熊さん〳〵と云はれると何時の間にか熊になつてしまつて不思議がらない世の中であるので是れは大變だと思つた。

處が賴んであつた專用の「タクシー」が來ないので臨時の大形バスがやつて來たので僕等三人も醉ばらいも一緒に乘る。斯うなると醉ばらいと雖もお客である。僕も杓に觸はつて居たので「君は一番奥の方へ乘れ」と云つたら「へい。どうも濟みません」とくる。全く「可愛らしき而も迷惑至極の醉ばらいである」。下車する時見て居たら登山者並に割引した處で料金を支拂つて居た。

春雪に描く

—神樂ケ峰春スキー—

孫

四月には珍らしい新雪を踏みしめて峠路を登つて行つた。曉雲の動きは稍々氣遣はれるがまあ天氣は持つらしい。行程は意外にはかどつて七時芝原峠だつた。新雪に惠まれた八木澤迄の滑走は今日のスキー行を象徴するかのやうに快適だつた（果して此豫感は事實となつて現れた）。有馬屋で朝食を攝つて愈々登高にかゝる、一昨年外の川の東電の番人が鉢卷峠で雪崩にやられて以來外の川へは大島村落の裏山を直接登るときいて居たが、今日が其最初の試だつたが取りついてみると、極平凡な尾根を直登氣味に二十分程登り詰めてから單調なトラバースを暫く續けるともう鉢卷峠の上に出た。時間から云つても雪崩の危險のない點から云つても、何故冬のルートとして、早くからこゝが選定されて居なかつたのかを怪んだ。栂の森林にかゝつてみると雪は意外に多く雜木の頭は殆んど見えなかつた。九時二十分思出多い外の川小屋に着

いた。取壊の運命にあつた此小屋もあまり立派に出來て居た御陰で其厄を逃れ、大鳥の森下重信氏があとを引受け一家をあげて住んで居た。其手製の梱シヤモジをリユックの中に收めると一行は慈惠ヒユッテさして更に行進を續けていつた。

程よくしまつた春雪の上をスキーはシールのまゝながら實に快適な滑りをみせて、豫定より遙かに早くヒユッテに着いた（十時四十五分）。こゝで輕い晝食を濟ませ、輕裝して今日の目的地神樂ケ峰に向ふ。

此の頃から天候はやゝ崩れ氣味を見せて風が募り始めた。現役の鷹野、望月兩君は午前中徹底的に殿をつとめてノロ〳〵と登り先輩連を待たすこと、再三、再四に及んだので、其點一寸訓戒を垂れた處、效果は忽覿面。今度は鷹野がラッセルで新雪深い清八澤の左股を庶二無二登りはじめた、春とは云へこゝまで登れば冬に近い。雪は粉雪に近く强風にあほられてくる雪煙は屢々行手を遮つた。が奮鬪一時間二十分、遂に上の芝の頭に出た（一時）。幸ひ風は大分凪ぎ、仰げば春光は燦々として輝き、近い苗場、遠い仙の倉、我々を圍繞する白銀の山濤は白光を放つて照り映えて今日の山行を祝福するやうだつた、「二時まで練習しやう」。

松木の聲に應じて金山君の描くボーゲンの美しさ。まことスキーにフイギユアがあるならば、これこそ、それか。水すましの水面に描く如く、左に、右に、スイスイと淺いシユプールを殘して走るスキーの滑かさ。暫時恍惚として氏の美技に見入るのみだつた、樂しい一時間が過ぎた。

「そら、あの眞白な尾根の先に少し木があるだらう、あの邊まで行つたら尾根を向ふ側へ降りてあとは例の大斜面を思いのまゝに滑らうじやないか」

やがて一行五名は神樂を後に春雪を蹴つて第一の目標に向つた。何さいふ快適な滑降だらう。五條のシユプールは近づきつゝ又離れつゝ春の處女雪に描かれた。尾根に立つて俯瞰すれば、おゝ、見よ、淺いU字形の谷を唯白銀の一色に埋めて涯しなく廣がり廣がる大斜面、其裾に先刻の登りのシユプールが糸の樣に微に見えてゐる。三年前の神樂行には技の未熟さに降れなかつた、此大斜面！

今日は幸運の新雪に蔽はれたスキーの感觸の柔かさ！滿身に漲る快走の熱情！やがてスキーは弦を離れた征矢の樣に走りに走つた。U字谷の春雪に自然のボーゲンを描きつゝ。中にも鷹野は斜面を落ちていくのではないかと思はれる程の急角度で彈丸の樣に飛んで行つた。喘ぎつゝ登つた梱の樹立を一散に滑降して、快走實に二十分にして再び慈惠の小屋に歸つた。（二時半）。

小屋から被川を經て降るあの林間滑走は何度繰返しても興趣盡きないルートだ。バッケンの邊から折れた望月のスキーは修繕のブリキ板が後斜面ではブレーキとなつてともすれば遲れ勝だつた。外の川の小屋を通り過ぎて梱の林を拔ける頃豫定の時刻は漸く切迫してきたので、今朝の尾根を一氣に降り、八木澤では有馬屋へもよらず、直に芝原峠の登りにかゝる。さすがに春だ。今朝の雪も、其下の根雪も、春光に融けてスキーを擔ふ足許はともすれば

滑つて苦しい登りだつた。五六丁先にゆく松木、金山、鷹野のパーティになか〳〵追付けない。登りきると待つて居た三人は直ぐ降り始めた。スキーを履く間にも見る〳〵三人の後姿は峠の向ふへかくれていつた(五時)。四十分あれば湯澤まで降れると胸算用しつゝ、峠の直下の急な夏路を融雪の御陰で難なく下りきつてからは峠路特有の緩勾配の雪路を樂に降りて行つた。シーズンの最後にふさはしい大滑降の後味を樂しみながら。

あとがき

日時。四月五日

一行。中川、松木、鷹野、望月、金山、

外の川の小屋邊から遲れだした望月のスキー(望月ではない、スキーだ)は遂に一行に追付かず、遲刻約二十分、六時過ぎ辛ふじて湯澤驛に滑り込んだ。上り列車が、幸運にも十數分延着したからいゝやうなものゝもし定刻六時(終列車)だつたら「朝歸り」となつたらう。張り切つて居なければならぬ現役が、豪の立ちかけた先輩に置いてゆかれるとは以ての外である。常に先輩より先に行き、仕度をして待つてる位の心掛が肝腎だ。

湯田坂君のことども

望月達夫

湯田坂哲君の死を知つたのは全く偶然の事からであつた。それは三月も終りに近づいた廿六日の事、此の夜は恰度針葉樹會の吉例懇親會があるので晝間外出した私は、用事の爲に佐々木君を訪問したのであつたが、同君より生前同じクラスであつた君の死を聞き知つたのであつた。佐々木君もその朝、三月廿二日死去、同廿五日葬儀を執行せる旨の端書を受けたばかりなのである。

君を知つたのは、まだ豫科があの懷しい石神井の長閑な片田舎にあつた頃の事、卽ち昭和八年の五月の或る日、部室で新入部員の歡迎會を行つた時である。爾來山岳部を通して交はる事まる三年、不幸にも常に病弱であつた君は、思ふ樣に山へも行けず、從つて多くの部員とも比較的緣が薄かつた樣である。君の訃報が直接私達の處へ來なかつたのも或は其の邊の事情のしからしむる處かもしれない。

私は「針葉樹」の七號と八號とを取り出して君が少い山への足跡をしらべてみたら、別記の樣に唯三つのものしか見當らなかつた。之を以つてしても君の健康が如何にはかばかしくなかつたかゞ知れよう。昭和八年末の五色のスキー合宿については、「針葉樹」の記錄には十二月十八日—一月三日と云ふ期間と、それから參加人名のみしか記るされてない。が此の時は私は廿五日から參加して居て、確か君と同じ夜に上野を立つた樣に覺えてゐる。五色では宗川に泊つて、既に連休を利用して來られた中川、松木近藤、增山等の先輩諸氏の歸京された後ではあつたが、十合、堀岡、宮川、中島、小橋、齋藤、小谷部、森脇、小林、豐田、鷹野等の諸君と共に毎日よく滑つた。北海道で育つた君は豫科一ではあつたが、其の冬始めたばかりの私達よりは遙かに先輩でいささかしやくにさはつたものである。其の年はなくなつた宮川君や堀

岡、十合の諸君が北海道へ行つたので、それから後の合宿は中島君が專らコーチとなり、森脇、鷹野等が歸京してからは君や私等ほんの數名の者しか殘らなかつたのであつた。暮れの三十日だつたか折からの晴天に君や中島君と、家形山へ登らうと思つて青木小屋へ行つた。恰度家形山小舍まで來た時、急に天候が惡くなつたので家形は中止して小舍で休んで青木まで滑降した。この滑降では君や中島君は充分に飛ばしたらしいが、始めたばかりの私は殘念ながらスツテン〳〵で、大そう心細い思ひをしたものである。青木に一泊して翌日の快晴を期待したが、それに反して靜かな雪ぶりの日、家形は斷念して往路を五色へとチラック中をもどつたのであるが、直ぐにおくれて先頭を見失ふ私を、君は幾度も待つて居てくれたのだつた。今でもあの時の事は非常に懷しい思ひ出の一つとなつてゐる。前の日の快晴には眼に染みる樣な強い光線をあびて、光と影の交錯する山々を、そして此の日は降りしきる雪片におぼろげな雪景色をたのしんだのである。始めてのスキーの旅はかそけくも君の姿と共に私の腦裏によみがへる。

その晩は大晦日だと云ふので終夜麻雀をやつた樣に覺えて居るが、其の中に君がまじつて居たかどうかはつきり記憶して居ない。昭和九年元旦の午後、私は君達に別れて一足先に歸京したが、君達は更に面白い幾日かをスキーを滑べらしつゝおくつたと聞いて居る。

次のスキー合宿、及び山行に關しては同行しなかつたので、其の時の君に就いては知る由もない。が岩殿山の時は、その記錄に同行者の一人鷹野が「岩殿と云つても岩登りに行つた譯ではないんで……」と記してゐる樣に懇親登山だつた相で、頂上の牛肉とオミキの會の寫眞は後日私も見せてもらつたが、君やスケさんやエチ公がいゝ氣持になつて居る姿が現はれてゐて、いゝ記念である。寫眞と云へば故宮川君の追悼錄「落葉」に入つてゐる先輩學生懇親會の折に寫したものゝ中には、後列の右端に在りし日の元氣な君が居る。

記錄の上から見た君の山は如何にも貧弱である。けれ共登山者の山への氣持と云ふ樣なものは決して表に現はれた記錄に依つてのみ云々さるべきではない。然も君は部の集會には始終よく出席してゐる。君を知る人には君の山を愛し部を思つてゐた眞情が解つて居たので、それだけに病弱の爲山へ行けぬ君を可愛想に思つて居たのであつた。

君のアダ名はガンヂーだつた。私達の仲間から「ガンヂー」が居なくなるのは淋しい事に違ひない。然し今は既に雪の山へ行つて居るであらう君の魂は、ひそかに部の爲に祈つて居てくれる事と思つて居る。

とりとめもないこの思ひ出が、君を偲ぶよすがともなれば幸である。（一一・四・二）

九州から

ARA

早いもので關門海峽を渡つてからもう一年經つた。日頃は何か

と忙しい上に拙文なので會報の原稿などは思いもよらないんだが最近日本山岳會へ入會して以來、毎月の會報を受取る度に針葉樹會の會報がちつとも來ないので、催促がてらに此つちの樣子をお知らせしようと、幸今日、日曜日が雨なのを利用して此を書く事になつた次第。

會報の事

第五十號記念增大號を受取つて以來一冊も來ないが、毎月出てゐるなら、それ以後全部を送つて戴き度い、し、出てゐないなら早く出して貰ひ度い、幹事さん面倒でもお願します。

九州の山

九州の山と言つた所で、醫者に運動を禁止されてゐる體で未だ何處へも行つてないので、見當もつき兼ねるが、知つてゐるのを擧げて見れば、阿蘇、犬ケ岳の二つ切り。阿蘇は九州切つての名山と言はれてゐるが、外輪山が非常に明瞭である事以外には別に驚く程の事はなく、三原山に毛のはえた位と思へば間違ない。バスが頂上近くまで登る丈三原山より仕末が惡いかも知れない。所謂バスガールの御案内と言ふ奴が此處でも盛んだが、その中に滿洲事變やら聯盟脫退、下り途では小唄まで出て來、驛へ着くと「皆樣の御健康を祈ります」と、實に御叮嚀樣である。レコードに入つてゐるから知つてゐる方もあると思ふ。犬ケ岳と言ふのは中津の西北に在る山で、石楠花(シャクナゲ)が立派で、天然記念物に指定されたと、去年新聞で見た憶えがあるが、それ程ではない。雪も風も酷くない爲か、皆な丈が高く、その點一寸珍らしく思つたが、あの位の石楠花ならザラにある。

九州でもハイキングの宣傳が盛んだが、未だ山はさう込んでないから、ぶら〳〵歩くには惡くない。久住の高原が一番好さそうに思へる。

山ではないが温泉に別府がある。湯の豐富な事は登別を知つてゐる僕には感心するにも當らないし、評判程ではない。町は熱河より一寸立派な位。

スキー

今年は何十年來の寒さとかで、南國の九州でも、一月二月は毎日々々雪がちらついてゐた。九州のスキー場としては阿蘇、彦山などがあるが雪の降つた日でなければ出來ないので、高尾山でスキーが出來ると言ふのより歩が惡い。

山口縣では一月中頃から二月中頃までは毎年スキーが出來る。一月に大友と一緒に十種(トクサ)と言ふ所へ滑りに行つて來た。山口市から少し先の德佐と言ふ驛の北にある九八九二米の高さの三角形に突んがつた山で、頂上附近が笹の斜面でそこで滑るのだが丁度野澤のシャンツエの斜面の上に上の手をくつつけて、その先に車山の樣な突起がある所だと想像してもらへばよい。僕等の行つた日は、雨の跡で、斜面が相當堅まつてゐたので滑りがよくて一寸面白かつた。小倉、八幡、門司などから、毎土曜の夜百人位は山口縣下へ出掛けてゐる樣で、盛んなのには驚いた。關のさゝや邊の家號の入つた札をリュックにぶらさげて、得々然としてゐる手合が大部分だから、押して知るべし。但し、競爭の選手が使ひ出した

あの鉢巻と耳覆とが一緒になつてゐるのをかむり、ウンドヤッケを着、大きいリュックを背負つてゐるのは、關東、關西と一寸も違ひはない。

遭難

今年も大分遭難の記事を見たが、知つてゐる人が、やられてゐるのは誠に氣の毒だ。東北で先輩の宇治原さんが死んでゐる。最近では、會社の臺北支店長の息子さんが八方尾根で、京都帝大の磯村、東京帝大の桂兩君が白馬で遭難してゐる。

磯村、桂君とは一昨年、バンバシマの取入口にて會つて、八峰へ一緒に行つてゐるんです。新聞で見ると磯村君は興安嶺の勇士と出てゐるから、興安嶺遠征隊員の一人だつたんだと思はれるが、二人とも相當山を歩いてゐる筈で白馬邊で遭難するのは何か原因があると思ふんだが、兎に角興安嶺へは行けても(?)白馬へ行けないと言ふ事もあるんだから實際山歩きには油斷が出來ない。

福久

關門では河豚をフクと讀みフグと濁らない。門司に居るお陸でフクも食へるが、未だ本當に味が分るとは云へないんだらう。特に甘いとも思はない。酒が飲めぬ爲かも知れない。餡及油こいものを食つた後で食ふと危いと言ふ——此の事は層ての針葉樹會の席上で中川さんから一席聞いてゐるので豫備知識はあつたが、——が、別にそうでもなさそうで本當に危いなら、もう二三度死んでゐる筈だ。關門の料理屋で食つた河豚に當つて死んだと言ふ話は未だ聞いてない。然し手料理では矢張時々死んでゐる。料理屋の板前が枕を並べていかれてゐるのもあるから、先づ餘り安心も出來ないかも知れぬ。一説に依れば關門の河豚は德山附近のものが多く、此はキモが危く、別府の河豚は中津のものが多く此は白子が危いと言はれてゐる。津久見——大分縣でセメント會社の澤山がある所——邊ではビリビリつと顏がコワバル位のでなければ甘くないと言ふ相で、そんな人等は關門の河豚は味がないと言ふ。僕は四國で、キモも白子も一邊に食はされた——知らずに食つたんだが——が別に何ともなかつた。後でそれと分つて「大丈夫かい」と聞いたら「よく煮たら大低大丈夫です」と。河豚の毒は煮ても燒いても消えないらしく、要するに毒の處を食へば當るんで、食つてから三十分位で、すぐ來る相だから勝負は早い。然し酒飲に云はすれば、河豚の酒、ヒレ酒はとても好いと言ふから、どうです皆樣、勇氣のある方はお出になりませんか、河豚の氣節は十二月—二月迄です。

それから大友も既にパパになりました。皆樣御存じとは思ひますが、爲念申上げて置きます。(四月十二日)

山岳部報告 (四月)

記錄

(1) 八方尾根スキー行(四、三—五)岩崎、其他
(2) 苗場神樂峰(四、五)先輩中川、松木、鷹野の三氏、金山淳二氏、望月

(3) 苗場山スキー行（四、八—一〇）林、柿原、岩崎
(4) 八ケ岳（赤岳鑛泉より赤岳、權現へ縱走）（四、一九—二一）森川、大塚
(5) 小金澤黑岳附近（四、二五—二六）望月、岩崎、松浦

日誌

○委員會　四月十一日（土）於國立部室
出席者（柿原、小谷部、森脇、小林、望月、森川、鷲崎、岩崎、原、新羅）
新入部員歡迎會及び歡迎登山の件につき相談す。
○豫科新入部員歡迎會　四月十七日（金）於小平部室
出席部員（本科十名、豫科六名）
新入部員（矢守勝一、里見治男、高橋廣三郎、宮城恭一、諸橋洋一、中西鋭）
○專門部新入部員歡迎會　四月廿一日（火）於國立部室
出席部員（本科五名、豫科二名、專門部三名）
新入部員、關根修（二年）
一年からは未だ確實なる入部者なし。
（尙、昭和十一年度の新委員氏名は會報五十一號に記載してあります。）

針葉樹會例會　五月二十五日（月）如水會館中集會室
茨木猪之吉氏
會員（中川孫一、吉澤一郎、村尾金二、矢作太郎、近藤恒雄
磯野計藏、久保田禮治、手塚晴雄、高瀨進三、園山德三郎、吉澤松次郎、增山清太郎、鈴木英雄、小柳二郎、芋川稔一）
部員（柿原、林、小林、小谷部、森脇、森川、望月、佐々木
新羅、岩崎）

會員消息

村尾金二君　品川區大井瀧王子町四三九七番地に轉居。
覺張泰三君（舊姓安達）長岡市表町三ノ九〇〇に轉居。
小柳二郎君　勤務先　鈴木三榮株式會社（味の素ビル內）
杉並區阿佐ケ谷五ノ四〇　澤氏方
鷲野雄一君　勤務先　日本郵船株式會社
横濱市神奈川區三ッ澤東町三八

編輯後記（幹事交代）

鎧太夫の後を受けて編輯の大任を委されて一年、誤植だらけの誠にお恥しき手腕を振つて針葉樹會のお歷々を大部惱しましたが、彌々依願免官です。僕のあとは實に國寶的編輯者增山清太郎君です。學生時代既に其の凡に非ざる事は天下にあまねかつた所、卒業後は龍門社でいよ〳〵磨がかけられやがて五十六號の會報に其の素晴しき手碗が窺はれる譯です。
會計幹事は其の業蹟を惜まれつゝ吉澤松次郎氏が後進に路を開く意味で退き、新進の會員小柳二郎君が實に男々しくもこの難役を買つて出られたのは、誠に針葉樹會として慶賀す可き事實です。
最後に一言會員諸兄に註文して置きますが住所變更、其の他登山記錄等は直接編輯者に報告して頂き度いのです。住所變更の通知も吳れないで後になつてから會報は近頃發刊してゐるのか！なんてしかられてはかないません。
（編輯　芋川稔一）